

Kawasaki 美術館  
金山平三の世界



《風揚げ》 1957-60 (昭和32-35) 年 37.3×45.4cm 油彩・板 川崎重工業株式会社蔵

長崎の「ハタ揚げ」に材を得て、  
作者の世界観を凝縮した傑作

本作は、一九六〇（昭和三十五年）年八月に朝日新聞社の主催で日本橋・高島屋にて開催された「金山平三 芝居絵と近作展」の出品作で、金山の画業のエポックとなった一九五六（昭和三十一年）の「金山平三画業五十年展」以降に描かれた近作に含まれる。翌一九五七（昭和三十一年）年から一九六〇（昭和三十五年）年間に、金山は新たな制作の地として長崎を選び、毎年春に訪れた。

長崎では「ハタ揚げ」と称して風揚げ合戦が盛んに行われ、赤青白を基調とした菱形の凧が数多く揚げられる情景が四月の町の風物詩となっている。本作に描かれた凧の模様や、画面中央の後ろ向き的人物の羽織ものの背中にも描かれた凧模様などが、長崎のものとはほぼ合致しており、おそらくこの作品は長崎のハタ揚げ取材したものであろう。

さて安定した画面構築に心を砕いた金山には珍しく、ここでは画面の大部分を占める青空いっぱいには揚げられた無数の凧の複雑な運動性が際立つ。しかし凧が人間により操られ同時に風により動きを得ることを考えると、本作は自然と人間の営みの表現に終始取り組み続けた彼の集大成であり、小品ながら金山の世界観が凝縮された傑作であると言える。

（兵庫県立美術館学芸員  
相良周作）

金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年（明治16年）神戸に生まれ、1964年（昭和39年）80歳で生涯を終えました。1909年（明治42年）東京美術学校（現在の東京芸術大学）を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年（大正5年）には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を受け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館（現・兵庫県立美術館）にすべて寄贈しました。

